

学生海外調査研究	
日本と唐・渤海などの周辺諸国家との文物交流についての研究	
氏名 谷田 淑子	比較社会文化学専攻
期間	2013 年 9 月 7 日～2013 年 9 月 21 日
場所	中国（北京・黒龍江省・浙江省）
施設	中国国家博物館、首都博物館、北京大学、中国社会科学院、上京龍泉府跡、黒龍江省博物館、上京会寧府跡、浙江大学世界歴史研究所

内容報告

1. はじめに

このたびの調査は、女性リーダーを創出する国際拠点の形成を目的としたお茶の水女子大学の助成プログラムによるものである。この趣旨に基づいて、わたくしは 2013 年 9 月 7 日から 9 月 21 日までの 15 日間中国に滞在し、資史料の調査収集および現地研究者との学術交流を行った。

わたくしの研究テーマは古代日本の対外関係史である。具体的には日本と唐・新羅・渤海の関係を考察し、複数国家の外交がどのように関連しあっているのかを明らかにしようとするものである。こうした研究を進める上では、日本と中国および周辺諸国家の間でなされた交流の様相を比較することは必要不可欠なプロセスである。古代東アジアの中でも、特に中国はその優れた文物によって日本・新羅・渤海からの使節や商人を引き寄せ、当時の東アジア世界における文化の発信地として機能した。こうした文化的かつ経済的な動向を理解するために、まずは当時の中国の文物の特徴について検討し、次いで日本・新羅・渤海などの諸国家における文物の特徴と比較し、それぞれにどのような共通点や独自性が見出せるのかを考察する必要がある。そこで今回の調査では、北京市内の博物館などで資史料の調査・収集を行うことを第一の目的とした。

さらに第二の目的として、渤海の遺跡の現地調査を行った。渤海は 7 世紀末から 10 世紀前半まで存在した国家で、朝鮮半島北部からロシア沿海地方にかけての領域を支配した。日本とも盛んな交流を行っていたことが『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』をはじめとする日本の歴史書から確認できる。また、渤海が日本との外交を保持した背景には、日本と協力することで新羅に対する立場を優位にしようとする意図があったことが指摘されている。しかしながら渤海自身が著した歴史書などの史料は今日残存していないことから、渤海の具体的な外交政策や文化的特徴については明らかでない部分も多い。渤海に関する文字資料が欠乏しているこうした状況下では、発掘によって得られる考古学的成果が渤海史研究に占める重要性は極めて高いといえる。そこで今回は渤海の都城のひとつであった上京龍泉府遺跡（黒龍江省寧安市）を現地調査し、遺跡や遺物の確認を行った。

そして第三の目的は、中国各地において現地研究者との学術交流を行うことであった。北京では北京大学の王小甫氏や中国社会科学院の李錦綉氏と面会した。黒龍江省では黒龍江省社会科学院で渤海史を研究している胡梧挺氏に同行頂き、渤海の遺跡・遺物を見て回った。浙江省では浙江大学の王海燕氏が主宰する研究会に参加し、現地の若手研究者と議論する機会を得た。

初めての中国渡航であり色々と不慣れなことも多かったが、たくさんの方のご助力を頂いて充実した調査を行うことができた。調査研究の成果について以下に記す。

2. 北京における調査研究

2.1 概要

北京における主な活動は、中国国家博物館・首都博物館・北京大学での資史料調査および中国社会科学院での李錦綉氏との面会である。

中国国家博物館は天安門広場の東に位置しており、60 万点あまりの収蔵品を有する巨大な総合博物館である。ここでは古代部門の展示だけで半日を費やした。北京大学大学院に在学する学生に案内を依頼し、中国古代の文物を見て回った。次に首都博物館では、北京の歴史や文化などを扱った常設展および企画展を見た。この博物館は 2006 年にオープンしたばかりで比較的新しい。施設の構造や展

示手法などの随所に新鮮な工夫が見られ、博物館学の観点からも興味をそそられる博物館であった。北京大学では学内の考古芸術博物館や図書館を参観したほか、中国古代史の教鞭を取っている王小甫氏の授業に参加する機会を得た。王氏の研究テーマは中国隋唐史および古代対外関係史であり、近年にも御著書を出版なさっている¹⁾。王氏の現在の研究関心などを拝聴できる貴重な機会であった。そして中国社会科学院では、対外関係史を研究なさっている李錦綉氏と面会し、わたくしの研究テーマである日本・新羅・渤海の交流についてご意見・ご助言を頂いた。

2.2 北京における成果

北京における成果は、第一に資史料の調査および関連書籍の入手ができたこと、第二に現地研究者との交流ができたことである。入手した書籍をいくつか挙げると、『旧唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』などの史料や、李大龍氏の『漢唐藩属体制研究』、魏国忠の『渤海国史』、栢根興氏の『唐朝与新羅関係史論』などの研究書である²⁾。また、北京でお会いした北京大学の王小甫氏、中国社会科学院の李錦綉氏および同社会科学の黄正建は貴重なお時間を割いて下さっただけでなく、わたくしの今後の研究の手助けとなる助言や激励も下さった。この場を借りて御礼申し上げる。

3. 黒龍江省における調査研究

3.1 概要

黒龍江省には9月11日から9月15日までの4泊5日で滞在した。黒龍江省における主な目的は渤海国の宮城跡である上京龍泉府遺跡の現地調査である。渤海は複数回の遷都を行っており、中京顕徳府、上京龍泉府、東京龍原府の3つが首都として利用された。今回訪れた龍泉府は最も長期間にわたって都として使用された場所である。上京龍泉府遺跡は黒龍江省寧安市に所在し、宿泊地である牡丹江からは車で1時間の距離であった。遺跡までの道のりにはトウモロコシ畑が続く緩やかな平地が広がり、時折車窓から見える民家はレンガ造りで煙突が付いており、北方の暮らしぶりが垣間見えた。遺跡は郊外にあったがわりあい良く整備されており、宮殿の配置や構造が観察できた。遺跡周辺には当時の瓦が多く残存して積まれており、この中から「都」の刻印つきの瓦を発見するという驚きもあった。このほか出土した遺物は遺跡そばの博物館にて見る事ができた。

牡丹江に2泊したのちは、鉄道で5時間かけて黒龍江省省都であるハルビンまで移動し、ハルビン中心市街にて2泊した。ここでは黒龍江省博物館の見学を行ったほか、阿城市の上京会寧府遺跡まで足を伸ばした。上京会寧府を都とした金王朝は渤海よりも時代は下る12～13世紀の王朝であるが、渤海と同じく北方民族によって樹立された王朝である。渤海文化との比較材料として興味深く観察した。

3.2 渤海遺跡の現地調査とその成果

3.2.1 上京龍泉府の全体構造

上京龍泉府は城壁をとまなう平地城で、南北を縦軸として縦長の長方形になっている。城は三重の城壁を持ち、最も外側を囲むのが外城、ひとつ内側には内城、最も内側にあるのが宮城である。外城までの全域がいわばひとつの都市であり、住民の居宅や役所や王宮が全てこの内側に包摂されている。日本でいえば平城京や平安京というような、「京」と呼ばれるエリアである。日本の京は城壁で囲まれておらず都と鄙の境界が曖昧であるが、中国の都城は城壁で囲まれている。長安城は都城全体を城壁で囲んだ、基盤の目状の区画を持つ都市である。渤海の上京龍泉府は城壁つきの都城であるから、日本の場合よりも忠実に長安城を模しているといえることができる。中国大陸およびその北方地域においては、城壁は都市の防衛上必要不可欠であったものと推測できる。

中国においても日本においても、都城の正面玄関は常に北にある。これは「天子は南面す」という思想に由来するもので、天子が最も南にいるためには当然北側が都城のしも手になるのである。長安城や平安京では、宮殿および官人の役所は都城内の南北中軸線上の最北部分に位置するという構造となっている。龍泉府でも、内城（官人の役所区域）とその内部にある宮殿（天子のすまい）は南北中軸線上の北側部分に配される。内城の正門をくぐって北へ進むと宮城の正門に至る。宮城は日本でいう内裏である。

3.2.2 宮城の構造

ここからは宮城内部の構造について述べる。宮城の正門を抜けると、北へと延びる縦軸上に5つの宮殿が配置される。5つの宮殿は基壇の高さも面積も不均一で、最も大きいのは南から2番目の第二殿である。このため第二殿がメインの宮殿であったと考えられる。このように縦一列に複数の宮殿が配置されているという点が、第一の特徴である。これは中国や日本とも類似する構造である。ただし長安城の宮殿は両義殿・甘露殿・延嘉殿・承香殿の4つで、平安京の宮城は紫宸殿・仁寿殿・承香殿・常寧殿・貞観殿の5つであるものの龍泉府の宮殿とは配置等のバランスが異なる。

第二の特徴は、宮城の正門の構造である。正門は基壇の高さが6メートルあり、基壇壁面は地面か

ら垂直に切り立っている。人の通行の際には正門の中央部を通るのではなく、正門両脇にある側門を使用した。こうした正門の構造が、第二の特徴である。この特徴は中国や日本と比べると特異である。長安城や平安京の宮城正門は高い基壇を持たず門下をくぐり抜けて通行できる構造であり、両脇へ回って通行する構造は太極殿などの建物に用いられる。

以上のように、上京龍泉府の宮城は比較的長安城を模しているが部分的には独自の構造を有している。特に宮城正門が高い基壇を持つことで、門の奥にある宮城空間を直視させず、また直進して通行させないようになっている背景には、渤海独自の皇帝観念もしくは儀式形態があった可能性を示唆させる。

なお、宮城を構成する石材についても最後に言及しておく。宮城の石材には黒色の火山岩が用いられている。龍泉府は長白山の裾野の位置しており、そのためこの地域では火山岩が多く採掘されると考えられる。火山岩は穴だらけの脆い素材であり、通常であれば用いられない。龍泉府の宮城の礎石だけでなく、宮城遺跡からやや離れた興隆寺境内に残る渤海時代の石灯籠も同じ火山岩が用いられていた。渤海国の風土が感じられる興味深い特徴であった。

3.2.2 出土遺物

出土した遺物は、大量の瓦や埴（レンガ）のほか、仏像・土製人形・鉄製武器・舍利容器などが複数点ある。最も多いのは瓦や埴で、文字の刻印された瓦や蓮華文様の入った埴も多く見つかっている。宗教的遺物としては金銅製・陶器製の小型仏像、金銅製の舍利容器、石造蓮華台座が出土している。軍事的遺物としては鉄鏃、鉄剣、甲冑などが出土している。

また、瓦は宮城遺跡の区画内にも多く残存しており、地面の中に埋もれているものや脇の草むらに積まれているものが大量にあった。草むらに積んである瓦を見てみたところ、うち1点に「都」の刻印を発見したのは良い記念であった。

3.3 調査の成果

以上、上京龍泉府の構造および出土物について述べた。宮城構造や建築資材には渤海の独自性が現れており、宮城構造からは渤海王権の支配意識や儀式観念が、建築資材からは渤海国の風土的特質が読み取れる。特に前者については今後考察を進めていきたい。今回の現地調査では、文献資料などでは分からない現地の「におい」というものを実感することができた。実際に自分の目で見る、自分の足で歩くことの必要性を再認識する調査であった。また、出土遺物についてはハルビンの黒龍江省博物館にも収蔵されているはずであったが、この博物館ではその頃ちょうど自然科学系の企画展示を開催しており、常設の収蔵史料を見ることができなかったのが残念である。

なお、黒龍江省で充実した現地調査を行うことができたのは同行して下さった方々のおかげである。黒龍江省社会科学院の胡梧挺氏、および通訳の金さん、馮さんに篤く御礼申し上げる。

4. 浙江省における調査研究

4.1 浙江大学世界歴史研究所「中国日本歴史文化研究会」概要

黒龍江省での現地調査を終えたのち、9月15日から9月19日まで浙江省杭州に滞在した。杭州での目的は浙江大学の世界歴史研究所が主催する「中国日本歴史文化研究会」への参加であった。この研究会は、國學院大學名誉教授であり横浜市歴史博物館館長でもある鈴木靖民氏が浙江大学教授の王海燕氏とともに実現させた日中共同の研究会であり、今回がその記念すべき第一回目の会であった。

わたくしはその場で口頭発表をすることはなかったものの、鈴木先生の御好意により研究会レジュメ集に研究報告を寄稿させて頂くことができた³。海外の若手研究者との交流を行うことができ、非常に有意義な体験であった。

4.2 研究会での所感

研究会の報告者は、日本側は東京大学・國學院大學・上智大学の大学院生4人、中国側は浙江大学・浙江工商大学大学院生および浙江大学講師の5人であった。研究する時代範囲は古代から近現代まで、そして取り扱うテーマも対外関係・気象異常と疫病・女性史・地域史など多岐にわたった。研究会での使用言語は日本語で、中国側の研究者が皆流暢な日本語を話すことには大変驚くとともに我が身が引き締まる思いであった。

この研究会のテーマは必ずしもわたくしの研究と合致するものではなかったが、しかし中国の若手研究者との親身な学術交流の機会を得ることができたのは大変光栄であった。なお、特に感銘を受けたことをひとつ述べるならば、参加した中国側の研究者はリベラルな意識が高かったということである。今回の研究会では近現代の日中関係についての研究報告が複数あり、たとえば第一次大戦期の中華民国における排日運動などのデリケートな内容もあった。しかしながら報告者自身を含むその場の日中両国の研究者たちの意見は実に客観的かつ冷静なもので、歴史研究会らしい学問的な議論をすることができた。このような形で両国の研究者が歴史について議論し、互いに研鑽を重ねていくことで、

学術交流を通じた日中両国の歩み寄りができればよい。そのように考える機会にもなった研究会であった。

4.3 杭州および天台の見学

日本人参加者一同は、王海燕氏のご案内で浙江省内の杭州市および台州市を見学して回ることができた。杭州での見学先は靈隱寺、浄慈寺、雷峰塔である。また台州では、臨海市博物館、龍興寺、国清寺を訪れた。

4.3.1 靈隱寺・浄慈寺・雷峰塔 —杭州—

杭州は西湖で有名な風光明媚の土地であり、歴史ある寺院などが数多く存在する。まず靈隱寺は、約 1700 年の歴史を持つ杭州第一の古刹である。4 世紀前半に西インドの僧侶慧理和尚が創建して以来、仏教の興隆にともない規模を拡大していった。寺院境内には岩肌を利用した仏教彫刻が多く存在するが、いくつかの石仏は頭部を破壊されていた。これは唐代末の仏教弾圧（会昌の廃仏）によるものと考えられる。境内には展示室もあり、幅広い時代の経典・仏具・掛軸などを見ることができた。

浄慈寺は 10 世紀半ばに創建された寺院である。日本の曹洞宗の開祖である道元に法を授けた如浄大師の墓があり、日本との宗教文化のつながりを感じた。

雷峰塔は 10 世紀後半に創建された八角形の磚塔である。雷峰塔は見晴らしのよい小高い山上にあり、塔に登ると西湖周辺の景観を一望することができる。10 世紀に創建されたのち、清代までは荒廃しつつも残存していたのであるが、1924 年に倒壊した。そのため現在の塔は 2002 年に再建されたものである。再建にともなう行われた発掘調査では塔の基壇部の遺構や大量の磚（レンガ）が出土し、これらは今も展示公開されている。

4.3.2 臨海市博物館、龍興寺、国清寺 —台州—

次に訪れた台州では、まず臨海市博物館を訪れた。この博物館では臨海市の現在に至るまでの歴史を紹介しており、希少な文物を見ることができた。同じく臨海市内にある龍興寺は、日本の天台宗開祖である最澄が受戒した寺である。寺院に接して旧台州府の城壁が残っており、付近の街並みも旧市街の趣を感じるものであった。

そして最後に、靈山として名高い天台山を訪れた。天台山はいにしえより仏教・道教の拠点であり、特に仏教においては天台宗発祥の地である。天台山は日本の仏教信仰とも強いつながりを持っており、最澄が天台山を訪れたことを先駆けとして、その弟子たちもたびたび天台山を目指して唐へ渡った。9 世紀前半に遣唐使とともに唐へ渡って五台山を巡礼した日本僧円仁も、天台山への巡礼を目指した一人である⁴。天台山中には複数の寺院が存在するが、今回わたくし達が訪れたのは国清寺である。国清寺は 6 世紀末の隋代に建立された、1400 年あまりの歴史を持つ古刹である。隋代に創建された高さ 60 メートルの六角形の磚塔が現存するなど、歴史的価値が非常に高い。境内には展示室があり、さまざまな時代の文物を見ることができた。

5. 結びにかえて

今回の海外調査研究では、中国の北京・黒龍江省・浙江省を 2 週間かけて巡り、資史料収集や遺跡の現地調査や現地研究者との交流を行った。北京では中国国家博物館・首都博物館・北京大学考古芸術博物館などの博物館を見学し、中国古代の文物の特徴を調査することができた。黒龍江省では渤海の上京龍泉府遺跡や金の上京会寧府遺跡を訪れ、都城の構造や遺物の特徴を調査することで、古代における諸国家の文物交流についての考察材料を得た。そして浙江省では浙江大学の研究会に参加し、現地の若手研究者との学術交流を行うことができた。さらには北京大学の王小甫氏、中国社会科学院の李錦綉氏、黒龍江省社会科学の胡梧挺氏、浙江大学の王海燕氏との交流は、わたくしにとって今後の研究に対する強い激励となった。このほか現地での支えや励ましとなった方々は数え切れない。多くの方のご助力があつて成功した海外調査研究であつたと実感する。

今後はこの調査で得た成果をもとに、古代日本と周辺諸国家との外交関係についてさらに検討を進めていく。具体的には、東アジアにおける唐・新羅・渤海と日本との外交が、いかなる経済的要因・軍事的要因に影響を受けていたのかを明らかにする。対外関係史を研究する上では海外の資史料や研究動向にも目を向けることが必要である。多様な研究視角を取り入れながら、今後とも自己の研究を深めていきたい。

注

1. 王小甫『中国中古の族群凝聚』中華書局 2012
2. 李大龍『漢唐藩属体制研究』中国社会科学出版社 2006、魏国忠『渤海国史』中国社会科学出版社 2006、栢根興『唐朝与新羅関係史論』中国社会科学出版社 2009

3. 谷田淑子「古代日本の対外関係と東部ユーラシア」『中国日本歴史文化研究会資料集』浙江大学世界歴史研究所 2013 p60~p69
4. 円仁『入唐求法巡礼行記』

参考文献

石井正敏『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館 2001
小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』1~4, 鈴木学術財団 1964~1969, 法蔵館 1989 復刊
酒寄雅志「渤海の王都と領域支配」『渤海と古代の日本』校倉書房 2001
鈴木靖民『古代日本対外関係の研究』吉川弘文館 1985
濱田耕策「日本と新羅・渤海」荒野泰典他編『律令国家と東アジア』吉川弘文館 2011

たにたよしこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会学専攻

指導教員によるコメント

谷田淑子さんは、古代日本の対外関係について、日本と唐・新羅・渤海の関係を中心に、東部ユーラシアという新しい視点から博士論文を作成中です。対外関係史を研究する場合、相手国の現地調査を欠くことができません。今回の海外調査研究で、谷田さんは、渤海の故地である中国・黒竜江省に赴き、なかなか日本からは行くことができない上京龍泉府の現地調査を行い、現地の渤海史研究者との交流を通じて、資史料や最新の研究成果を入手することができました。また、北京では、中国社会科学院歴史研究所や北京大学で、唐の対外関係史の著名な専門家に教を請うことができたのも収穫でした。さらに、浙江大学で開催された国際学会に初めて参加できたことも、今後、谷田さんが対外関係史を研究していく上で大きな経験となりました。浙江省では、杭州や天台山の史跡・遺跡を見学して、古代の遣唐使や留学生・留学僧たちの足跡をたどることもできました。このような盛り沢山の経験と入手した新しい資史料や研究成果を、是非とも博士論文に活かしていただきたいと思います。
(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化科学系）・古瀬奈津子)

A Study of the Cultural Exchanges with neighboring Countries -Tang, Bohai and Japan-

Yoshiko Tanita

In this investigation, I researched about the features of cultural productions in China. 7~10 century, Japan had the diplomatic relations with Tang, Bohai and Silla. Tang, especially in these neighboring countries, was the epicenter of culture. Many cultural productions were spread from China to other countries. Therefore I examined the difference of productions in these countries, and tried to make the movement of culture clear.

The activities that I have done are the following three points: obtaining historical records, a field survey of the ruins of Bohai, and academic exchanges with Chinese scholars. Through these activities, I have examined the cultural exchange with China, Bohai and Japan and have gotten the knowledge useful for the study.